

子どもを中心にした地域の未来づくり

認定特定非営利活動法人 インクルいわて

理事長 山屋 理恵

子ども食堂とは

「子ども食堂」を知っていますか？ 子どもが一人でも安心して参加できる無料または低額の食堂の総称であり、市民発の取組みです。2019年6月には、全国に少なくとも3,718か所と発表され、現在も増え続けています。

子ども食堂は、月1回開催のところから365日3食の提供のところ、数名を対象としているところから毎回数百名集まるところなど実に多様です。目的も、食事提供から、孤食の解消、滋味豊かな食材による食育、地域交流、世代間交流の場、課題発見などさまざまです。また、担い手は個人、学生、任意団体、NPO、企業、行政など、多様な価値観をもった多くの地域の大人です。共に食事をしながら心の栄養も摂取しています。ここは新たな居場所であり

り、新しいつながりができま
す。大人は学生時代からの人間関係や、職場の人間関係など、ひとつ居場所が奪われてもほかの選択肢があります。また、PTA活動の繋がりが頼もしいものです。しかし、子どもにとっては、基本的に家と学校以外で新たな居場所をつくることは難しいことです。

貧困とは「経済」「時間」「つながり」の3種類がある

子ども食堂は貧困対策と捉えている方も少なくないようです。「貧困」とは何か、定義はひとつではありませんが、「人としての尊厳が守られ、人権が守られ、社会参加の機会が保障されていない」「人が『選択』の力をもてない」「状況と言われ、人を「社会的孤立」に追い込み、居場所さえも奪い、人間が生きて

いくぐえでの精神的な豊かさ
「安心感」「人とのつながり」「自尊心」「希望」「安定した居場所」「選べる力と機会」を奪う、また経済的な要素だけでなく、資産があっても「時間」に余裕がない、「つながり」をもてないことも貧困状態であり、孤立や生きにくさを生じさせるものです。

困ったときに力を発揮するのは行政、福祉の専門職であって、一般市民の自分にはできることはない人々に感じさせてしまったこと、これが子ども達と子育て世帯の大変さを見えにくくしてしまいました。そのような壁を無くしたのが「子ども食堂」だったのです。

関わるのは主に地域のふつうの大人であって、福祉の専門職だけではありません。「誰もがもっと子育てに関わったほうがいい！」子ども食堂はそうのように専門外の人たちの

認識を促し、それが地域力を高めるための有効なツールなのだと思います。これは決して小さな地域の問題ではなく、誰一人取り残さないという「SDGs（持続可能な開発目標）」の取組みと合致します。

また、「うちの地域は子どもが減っているし、子育てもそのうち地域がなくなるかもしれない、昔ながらの地域コミュニティの『復旧』ではなく、より包摂的な『地域づくり』を求めて、子ども食堂を応援する」、そういう現象が、全国各地で起こっています。

弱まっていたはずの地域のつながりが、子ども食堂を介してより多様な人々が参加し復活するというPTAの活動報告もあります。子どもが卒業しても、子どもを持たない人も、単身者、高齢者も、障がいのある人も地域や子どもと関われる場でもあり、自分の子どもの頃と今は違うことを知り、未来を視座する機会となります。多くの大人の学びなおし、生涯学習の一つのテーマです。子ども食堂というネーミングではありませんが

多様な人々の居場所として価値あるものなのであって、地域共生そのものです。

この取り組みは、子どもにも何も望みません。つまり、すべての大人が我が事として取り組めば「気づき」から様々な「築き」に変わり地域活動につながり、自分の住む町の地域力を強める、子どものためのみならず、全ての人とその地域のセーフティネットとなり、防災や、地域消滅危機対策にもなる可能性がある、それはすべての人にとって生きやすい未来、地域になることを指し人生100年時代のモデルづくりでもあります。

プロフィール

山屋 理恵 (やまやりえ)
震災を機に社会的包摂を理念としたNPOを設立。内閣府、厚労省等の委員、いわて内陸避難者支援センター長、子どもの居場所ネットワークいわて共同代表などを務める。

